『教育研究』40 (1998) pp.233－257
Educational Studies, 40 (1998) pp.233－257
International Christian University

農耕者と漁労者の比較心理（1）
――年中行事を通しての信仰心――

服部　純子

［問題］

現代において、心身症、神経症、うつ病、そして、自殺、いじめ、若年の殺人事件（神戸の事件等）など、心や魂の病いから派生した社会現象が、相変わらず増加をたどる一方である。その背後には、物質・機械文明の世界観が存続している上に、仮想現実の増大化に繋がるコンピューター社会の情報ネットワーク化が台頭してきて、累積してきた人々の疲労感が、はけ口を求めて、このような形をとってしまったともいえる。

すなわち、無意識の中で、心の傷、あるいは心身症・ストレスの引き金になるものを蓄積してきてしまったのだろう。その反動が、閉塞感に見舞われ、生きがいを喪失し、人間らしく生きられないことに気がつき始めた現代の病める人々の姿に反映され、また環境問題に象徴されるように疲弊してしまった社会にみられる。

ところで、かつて、都市化・産業化・情報化の近代社会の在り方とは、基本的には対照的な生業に従事する人々の社会意識を、筆者は実態調査したことがある。その「人と環境」の相互作用の観点からの南紀の漁村・農村の実態調査(1994)では、土地に定着して作物を営む、静的な生業に従事する農業者と、漁のあるところまで移動して獲得する、動的で死という危険にさらされる生業に従事する漁業者を対象とした。特に、人間の存在と関わりの深

い宗教・信仰に対する態度（6つのカテゴリー軸の中の一つ）については、死後の世界の存在や死についてはあまり考えないと回答しているが、実際、漁村（管理型漁村ではない）では、日常、命日や彼岸に固執せずにお墓に頻繁に参り、神頼み的に祈り、農村の方では、彼岸や命日に参ることが多いという、一見回答と矛盾するような行動結果がみられた。先祖や死者の魂を拝んだり、信仰する行為（漁・農民に限らず現代の我々もそうであるが）には、死後の世界あるいは先祖の魂の世界、神霊界が、無意識のうちに前提となっているのであろうが、意識上には表れていないのである。その調査における今後の課題としたことは、さらにその点を追及したいということであった。

自然の推移に基ずいて生業を営んできた人々の宗教・信仰に対する態度を、さらに心理学的に比較検討をしていくことが、魂の癒しが切実に求められている現代において、何らかの有意義な示唆を与えてくれるものと考えられる。今回は、その第一報として、特に年中行事（文化人類学・民俗学的立場）を事例研究に用い、その行事を通じて反映される農民と漁民の宗教心の相違と特徴について、心理学的に考察していくことを目的としたい。なお、年中行事を用いた理由は、温暖で四季折々の変化に恵まれているが、台風等の自然災害にも見舞われ易い日本の風土において、農耕文化および漁労文化を背景にした人々の心理が、信仰心として庶民の生活の暦に反映されてきたと思われるからである。

わが国の農耕文化には、焼畑及び畑作農の基層文化時代の面影がみられるが、瑞穂(みずほ)の国といわれたように、古来より重視されてきたのは、特に水田における稲作であり、五穀豊饒を常に祈ってきた歴史がある。一年を表す、そのトシ(年）という語は、農作物が稔ることを意味し、特に米作の春耕秋収穫の周期をトシとするようになった。

一方、漁業といってもほとんどが半農半漁の村で、年中行事には農耕的な祭り事も含まれるだろうが、今回は、自然に対応する仕方が異なる生業を背景にした、両者の心理の差異をみていくことを主眼とするので、なるべく漁村においては漁労と関係する祭り事を選択することにした。

[方法]

文献・事例研究に基づいて、農民と漁民の年中行事を比較しながら、その差異および特徴を考察する。

年中行事に関しては、和歌森太郎(1957)、(1970)、宮本常一(1975)、宮城雄太郎(1976)、宮本登・荻原秀三郎（1980）の文献を参照にする。

留意点は、大きく２つあげられる。

（1）漁業と農業という生産・生業過程の違いの上に、各地域の生産形態の差異とその地域のもつ自然のリズムで年中の行事、祭りごとが行われるので、自ずと年間における行事内容やその日程も異なってくることになる。たとえ同じ内容であっても、各地域の自然・風土に密着して行われるので、行事の日程には地域差がみられる。結果をまとめる場合には、一年を通し、半年毎に似た行事の繰り返しや地域により日程が異なるが同意味の行事内容が多々あるが、めやすとして日程を用い、行事内容の類似については、重要だと想定されるものにはあえて重複して記載した。

特に、漁村の場合、各地域で行事に変化があるが、傾向および共通な特徴をあげ、なるべく類例として地名をあげることに留意した。

（2）また、現在のように、太陽暦に基ずいて行事が遂行される明治五年(1872)までは、陰暦に基ずいて、各地域で行事が催行されていた。今回、結果をまとめていく上では、旧暦を新暦に統一するように心がけたが、日本の風土には旧暦の方が適切だったので、旧暦の日程が重視されている場合はそのまま新暦にも移行した。農村では、元旦の大正月よりも、十五日の小正月を重視する傾向があるといわれている。例えば、新暦の一月一日は旧暦では十二月八日にあたり、冬も真っ盛りで、地域によっては農事の片付けが未だ終わっていない頃である。漁村の場合は、月の満ち欠けが潮の干満と一致するため、旧暦を重んじる傾向がみられる。

［結果］

一月の行事

（A）農村

農民にとっては、正月よりも重視している一月十五日（望の日）の小正月を迎えるまでの間にさえも、三日歳取り、鳥追いの意味合いをもつ七草粥で祝う七日正月という、前段階の精進的な行事が祝われる。小正月には、豊かな実りを模擬的に飾りたてて、年の神にみてもらう餅花、稲の豊作を願い予祝する庭田植、田畑の害虫を駆除する虫追い、稲の豊凶を予見する粥占いなど、農耕儀礼の予祝・予見的な行事を行う。また、小正月の塞の神トンド祭りでは、神の霊が宿った正月の松飾りや注縄などで小屋を作り、村境で焼き、災厄の侵入を防ぐ。

（B）漁村

元旦正月を祝う前の未明に、若潮迎え、潮垢離の行事を行う。九州他各地においては、海水のついた藻で身体をはたき心身を清める潮斉がみられ、神社や家を禊ぐために潮水や海藻、砂を持ち帰る。宮参りの行き帰りに、たとえ知り合いにあっても、穢れが入ることを恐れ口をきいてはいけないという。忌み謹む態度が、漁獲高を左右させると信じられている。

正月二日の初乗りでは、船霊様を帆柱に奉め、航海の安全を図る。乗り始めの儀式においては、氏神、龍宮様（竜宮様）に御神酒を供えて祀り、恵方に向かって縁起を祝ってから出漁する。漁村の場合、正月休みを機に、早くて二日、遅くて十一日に、労働契約の行事がある。初乗りや氏神参詣後に、漁業者は、船主や網元が催す祝宴で労働契約を結ぶ。船祝いや年始の豊漁予祝を兼ねての、労働契約行事である。契約日や正月に限らず、常に、氏神社と竜宮様や恵比須神社に参詣するが、漁村では恒例である。

十日前後に、龍宮祭・龍王祭という、海上安全と大漁祈願する行事が各地の漁村で行われる。龍宮祭には、恵比須神を祠ることがある。また、網元は、

神主または巫女のお祓いを受けた神社参拝後、龍宮祭の祝宴をひらく。龍宮祭を機として、神前での籤引きで網代の割り当て等を行う。

二月の行事

（A）農村

二月一日を、送り正月や小松正月と称し、年神を送り雑煮で祝う習慣がみられる。特に、厄年の者は、二月一日に更に年齢を重ね厄を払ったことになり、重ね正月を祝うという。また小正月から正月が始まると考えていた農村では、二月一日を初朔日といい、農事前に厄を落とす必要から仕事を休む。

二日灸は農事開始前の厄除けとされ、旧暦の二月と八月の二回、いずれも二日にすえ、年中無病で過ごせるという信仰がある。また、二日は、契約更新の行事があり、奉公人の出替わり、人生を新規に出直す考えがある。

三日か四日の節分の夜は、災厄が各戸に侵入しないように過ごす。五日あたりの立春も新しい年の始まりと農村ではみなしている。特に、東日本では、二月と十二月の八日をコト八日といい（コトは神事であり、その神事の根本は物忌にあった）、一年にわたる農事の十二月八日（あるいは十三日）から二月八日の二カ月が、物忌期間であったとされる。二月八日の事納めの時期、物忌み終了期は、地域差はあるにしても、その頃がいわゆる立春と重なる。山の神は、春は山から降りて来て、田の神となり、秋の刈り入れが終了すると、山に帰っていく田の神の風習は、いずれの地域においても同様にみられる。

（B）漁村

漁村でも厄落としのために、厄送りの儀式を行なう。例えば、壱岐島の世上祭、福岡市の住吉神社の鬼平げ祭、倉敷市の夜叉祭、など災厄を防ぐ追儺式にみられる。佐賀県有明海岸の太良町では、五日の夜、観音堂での加持祈祷後、裸の若者たちが鬼箱を奪い合い、翌日には、太良町沖にある沖の島の鬼がその鬼と通じてしまう。部落に災難がもたらされるので、それを防ぐために若者が騒ぎまわるという、鬼の祭事が催される。

三月の行事

（A）農村

三日に雛祭節句が行われるが、もともと身体につく災いを形代に託して流すべき日であった。紙や布で厄祓いの人形(ひとがた)を作り、供物をそなえた祭壇に飾ってから、水に流して厄を祓除する。

三月、かつての旧暦二月は、田の神が山の家を出て里に降臨し、春の稲作を見守る月だとされている。新暦三月十六日に田の神迎えを各地で行事としているが、特に東北や北陸に多い。十六日に、農神が山から稲種を持って降臨するとされ、団子十六個を枡にいれて神にお供えする。十六日が祭日なのは、旧暦の満月を過ぎ、春の稲作の農事に着手する前の日だったからである。十六日ころの田の神迎えの春の行事を、春ゴトまたは春亥子と呼び、特に西日本、特に関西中国の方面で集団的に行事を楽しむ傾向がある。また、十九日前後に、春の社日（中国から伝来）が訪れるが、土地の神だから農耕生活との関係は深く、田の神さま（信州)、作神さま（九州）といわれ、農事始めの日である。

彼岸の中日、春分には、農村では、墓参や寺詣が盛んとなる。昼夜等長の彼岸時、農民は、午前中、日に向かって東に歩き、午後には西に向かって歩き、日迎え日送りの日とみなして太陽の恵みを拝む風習がある。このように、彼岸のときに、日の出とともに、遠来から尊い神様が来訪するので、その神を迎えて接待するのである。

（B）漁村

浜降りは、三月の節供頃に催される神事であり、神の降臨された浜辺で行う。浜降りの朝、磯に出て潮水を汲み浜辺の小石を拾って帰り、海水は家の内外に撒き、小石は部落に納めるという、神聖な儀式である。磯開きの行事（日程は土地の漁で異なる）では、漁獲豊漁を望み、解禁日に漁獲物の一部を神前に献じる。

大汐という春潮の干満の大きな時期に、大漁や海上安全を祈念する、浜祭

りの行事が各地で定例的に催される。重箱に肴を詰めて恵比須神社前に集まり、神官の祝詞の終了後、境内に筵を敷き、春豊漁の予祝の宴を開く。神前で、春漁の方法や網代割や網の引順を決めるので、違反者は神罰を受けるとされ、神前で決め事をする。

また、不漁や潮流の不順が長期にわたると、潮祭という、漁祈祷、潮直し(まんなおし)が各地で催される。潮祭では、神社に参籠する場合が多い。漁師は、網元と山あての対象の山に登り、神社で御神酒を戴き、網元の家で催される潮直しの酒宴に列席するが、これは、不漁を契機として、豊漁祈願と骨休めを兼ねた親睦の時でもある。

四月の行事

(A) 農村

四月八日は、釈迦如来の誕生の日で、灌仏会の行事が催される。しかし、この日は、もとは仏教とは関係がなく、山の神が農村に迎え降ろされて、秋の末まで田の神になっているとする信仰が全国的にみられる。この日に、霊山に登り天道花を摘み、その花を竿の先につけて家の外高く立て掛ける風習があり、その背景には農業には最も大切な太陽、日の神を迎える(宮本常一、1975)のである。四月八日ころに田の神を迎え、本格的に農事に取り組む。

四月十五日(望の日で折り目)には、諏訪の上社の御頭祭(おんとうさい)がある。稲の籾種を、境内の清水の沸く泉に落とし、その沈み具合をみて、その年の稲の豊凶を占う。タナフタゲエ(種浸粥)というカユを、この日に神前に供える。できるだけ多くの参拝者が参り、種を浸し共同で祈願すれば、豊作になると信じられている。

(B) 漁村

春潮の風に戯れる磯遊びや、豊漁を祈願する、恵比須信仰が強い水天宮祭等の春祭がみられるが、一般的に四月は祭りは少ない。

恵比須信仰が強い富山県新湊市の西宮神社で、二十日のポンポコ祭りに代表されるように、恵比須神を祠る船祭りを、各地で催行する場合が多い。船

に神饌を運び入れ、港から出て一周する際に、沖で神饌を海中に放り込み、恵比須神に供え豊漁祈願を行う。

五月の行事

（A）農村

五月は田植えで重要な月とされる。特に、田植えの支度で、潅漑用水への依存が不可欠となる地方では、五月一日（新暦では通常六月一日）にも、水の神を祀る伝承、例えば、水下祭（新潟県西頸城郡）、キトドキ祭（熊本県球磨郡）がみられる。

五日は端午の節句ではあるが、五月五日は女の家といわれ、もともとは五月女・早乙女たちの、田植えを目前にした重要な物忌み日だったのである。四日には、悪い虫、魔を避けると信じられている、菖蒲を家の入り口や軒にさしたり、屋根を葺いたりし、菖蒲湯につかり、夜は女性のみが物忌みしていた。田の神となった村の男は、田の神の巫女となった女の許を訪ねるのであり、男の訪問に先だって、禊が厳重に行われたという（折口信夫、1930－1935）。

十五日も同様に物忌み日とみられ、田植え開始前に、田の神を迎えるサオリを行う。家の床の間などを祭壇とし、苗代からの苗を三把供えるところが多い。特に、十五日を物忌み日としてきたところは、中国、四国に多く、お伊勢さんの田植え（五月下旬）と称して、実際には田植えを行わずに、正月の餅花を降ろして粉にし、虫除けに撒き散らして、忌を守ってきたのである。田植え作業が滞りなく遂行されることを祈り、特に、五日、十五日を物忌み日とした。サオリ終了後、早乙女をはじめ田植えに参加した人々を、サナブリ、サナボリと呼ぶ、田植えじまいの祝宴に招く。

（B）漁村

五月、特に上旬に漁村各地で、神霊が海上渡御する、海上安全や豊漁祈願するお船祭りがみられ、必ず宵やみで神霊を移魂しておく。例えば、五月三日の茨城県北茨城市大津の佐波々地祇（さわはちぎ）神社の祭りでは、漁船に

神霊を乗せて町内を渡御し、船神様と信仰されている佐波々地祇神社へと還幸する。山口県阿武郡那古町の鹿島神社の漁神祭は、漁船多数が海上渡御に随行し、裸体の若者が何度も水中に飛び込んで、海神の霊を慰めるのである。他の行事としては、大漁祈願や海上安全を祈って催す島参り（金華山の神社祭等）、船ぐろとかおしぐらんこ（九州での呼称）という船漕ぎ競争の祭りが各地で行われる。例えば、島参りには、冠島では、旧暦五月に、若者たちは、老人島神社が祀られているその島に着くと、社の周囲を清掃し、神饌、神酒を供えて、一同が礼拝し、波打際には各自の石の塔を積み上げる。積み重ねることは大漁を意味するといわれ、大漁と海上安全の祈願の帰途に、櫓漕ぎ競争になり、漕ぎ比べし、勝敗によって、年の漁事の豊凶を占う。

六月の行事

（A）農村

一日は、歯固めの餅の日であり、再正月を迎えるために、保存してあった正月の餅を食す風習は、広く伝承され、これを食すと、歯を丈夫にし、健康で長寿を全うすることができるという。また、この日は田の水を穢すな、田に入るなといわれており（和歌山県日高郡他）、川祭り・川入り節供（九州他）と同様に、水の神を祀る行事がみられる。川祭りの行事に関しては、全般的に十五日になっているところが多い。

六月半端になると、田植えが終了し、草とり、虫送りなどの行事で忙しくなる。虫送り行事は、神主を先頭に大きな松明をもった行列が、虫を送った、送ったと唱えながら、稲田の周囲を回った。かつて農民は、疫病の流行だけでなく、稲の害虫の繁殖を、荒ぶる神、あるいはこの世に恨みを残して死んだ、御霊のなせるわざと信じていたので、荒神鎮めを行った。藁人形を、虫送りの先頭に立てて、害虫をとっては人形の中に押し込み、村境まで持っていって捨てる。

三十日は、夏越の六月祓を行う。藁や麻でなった縄の大きな茅の輪を、神社の鳥居の下、拝殿の前などに据え、参拝者は繰り返しくぐり、あるいは農

家代表の庭先に据え、農民が集まってくぐり、厄を祓った。

（B）漁村

六月には、六日に三重県島郡浜島町のエビ供養の行事、十日、高知県室戸市のシットロト踊り等の魚供養の行事が多い。

海上安全と豊漁祈願の、海神の祀りである龍宮祭の行事を、長門、岩見、紀伊地方では正月行事として行うが、むしろ六月に、この祭を行う漁村の方が多い。三日の淡路の洲本市由良の由良八幡社の龍宮祭、十四日と二十四日の福岡県博多湾口の志賀島の志賀海（しがわた）神社の龍神祭、十六日から十八日までの神島の浜の龍宮に参詣する御祭（ごさい）等がある。

また、六月には、龍宮祭ではないが、漁神を慰める祭が催される。例えば、十日、蛭子（えびす）神社（大分市浜町）の漁神の祭では、蛭子神を祀る神事で、三百隻余りの漁船が船中に篝火を焚き、五色の吹き流しをたてて、盛大な賑わいのもとに神輿の海上渡御が供奉される。旧六月十三日の島根県隠岐島の都万の漁神祭の前夜、氏子たちは宮に籠り、神官に大漁祈願と海上安全の祈祷をしてもらう。

七月の行事

（A）農村

お盆は、関東の方では七月に行われるが、農繁の地方や西日本では、月遅れの八月にずらして行う。すでに七月一日（釜蓋朔日で盆行事の物忌みの始まり）、二日、三日ころ、東海地方や岩手県の農家では、墓場の掃除および盆道作り等の作業を始める。七日は、七夕という中国伝来の星祭りを行うが、もとは先祖の霊を迎えて祀るお盆の始まりといえる。この日あたりから、墓所を掃除し、盆提灯を吊るし、先祖の霊が故郷の家に辿り着けるように支度をする。

十三日は、一般に精霊迎えの日である。夕方墓参して、迎え火を焚く。仏壇に、明かりを灯し盆花を飾り、先祖の霊を家の中に迎え入れる。十三日から三日間後の、十五日か十六日夜、家族は、供え物を盆の精霊棚から降ろし

て、先祖の霊を、灯明で照らして送る。お盆には、施餓鬼供養のように、無縁の仏に対して、粗末に扱うと何か祟りがあるといわれてきたので、農村では、特に餓鬼棚をおいて供養する。

（B）漁村

七月は祇園祭等の夏祭りが盛んで、特に漁村では、祇園祭は京都市の八坂神社の系統の八坂神社祭りが多い。例えば、北海道留萌市、鳥取県米子市の祇園祭は、旧暦六月十五日が祭日であり、賑やかに提灯を連ねた供奉船を従えたお迎え船が、海上渡御し、お旅所から神輿を迎えて本社に還幸する。京都府与謝野郡伊根町伊根浦では、八坂神社の例祭が二十六日から八日まであり、神霊の海上渡御を行う。

また、神奈川県足柄下郡真鶴町の貴船神社の例祭は、十六日から二十日までであり、祭神が真鶴崎に降臨されたのを住民が子舟を連ねてお迎えしたという由緒による、海上渡御が催行される。

漁村では、無縁仏の精霊流しが行われる。例えば、山口県沖家室島では、流れ観音流しといい、漂流死体である無縁仏の霊を慰撫するために、村人は船で沖へ乗り出し、供物を捧げて施餓鬼供養をする。瀬戸内海西部では、不幸な死に方をしている者は、浄仏できず、時折人に憑依して、生命を奪うという。

八月の行事

（A）農村

八月一日は、その年の穀物を収める田実りの八朔の節供の日であり、特に瀬戸内海地方では、団子をこねてタノモ人形を作り、身体に憑く災いを祓除する。

八朔は二百十日前後にあたり、早稲種の場合には、台風の被害に会わずに豊作であるように、農事を休んで忌み、田植え仲間で祈念する。また、七日には、各地で風鎮めのための風祭が行われる。村人が風日待(かぜひまち)と言って寄り合いを催して飲食したり、氏神の拝殿にお籠りしたりする。

（B）漁村

八月一日あたりになると、八月潮で潮が変化し、漁事にちなむ祭事を催すところが多い。例えば、千葉県館山市の安房神社では、八月の望の日に初潮祭を行う。茨城県大洗町の大洗磯前神社でも、同日に、初潮の祭りが行われ、隣りの那珂湊市でも大漁祈願の祭りが催行される。

八月半端に、夏越祭がいたるところでみられる。伊勢志摩地方では、十五日に、三重県四日市富田一色町の飛鳥神社で、豊漁と家内安全を祈願するケンカ祭、同日、富田の島出神社のクジラ船と引き回す船祭、十六日の三重県志摩郡磯部町渡鹿野の海女の神輿祭、十五日の新潟県三島郡出雲崎町の、色鮮やかな大漁旗等で飾る約70隻の漁船祭、十七日の富山県魚津市の諏訪神社の海の神に航海安全と大漁祈願し献燈するたてもん祭、等が催行される。

愛知県幡豆郡一色町の諏訪神社の、二十六日、七日の大提灯祭りは火祭りであり、社前に大篝火を焚き、種々の災厄をもたらす、海から来訪する悪魔を退散させる祈祷を盛大に行い、家内安全、大漁満足の祈願を行う。

また、盛夏には、特に鯨の供養行事が盛大に行われる。和歌山県東牟婁郡太地町、山口県長門市の通浦、長崎県南松浦郡有川町等で魚供養を兼ねた鯨踊りが催行される。

九月の行事

（A）農村

旧八月十五日、新暦九月十五日、十五夜のお月見の日であるが、畑作の収穫物である芋を供え食べるので、芋名月の名称があり、もともと畑作の収穫物を祀って祝う。

（B）漁村

九月の秋祭りは、十月の仲秋の祭り程多岐にわたらないが、各地でみられる。例えば、千葉県長生郡一宮町の玉前(たまさき)神社では、十日に鵜羽神社御迎え祭が催され、鵜羽神社の祭神は姥神で、その守護によって子供は丈夫に育つとの俗信に基ずき、また、豊漁と海上安全を、この祭に託している。

石川県鹿島郡中島町の久麻加夫都阿良加志比古(くまかぶとあらかしひこ)神社での宮祭りで、氏子が十八カ村、末社が十九カ社が相集い、その賑わいは能登半島では最大のものである。山口県玖珂(くが)郡大畠町は、男女の夫婦神の二神社が、九月二十三日に合同祭礼し、にわか祭が催行され、豊漁祈願と海上安全を願い、男女両神を慰めるのであり、威勢のよい神輿渡御や鳴門の海へ神輿を投げ込んだりする。

十月の行事（農村、漁村のいずれも多忙）

（A）農村

十月、旧暦九月は、稲の収穫期にあたり、刈り上げ行事、収穫祭が各地で行われる。農家では、米の収穫を終えた頃で、村人が神社に集まって飲食し、小豆を入れて餅を搗いて食べたり、終日過ごす風習が各地にみられ、稲の収穫祭りといえる。旧暦十月の初亥に、亥の子祀りが、近畿から南九州まで行われる。子供たちが夜間、組をなして各戸を回り、各々の家の前の地面を、石や藁苞でついてまわる、亥の子搗きという風習を行う。土地に籠もる精霊に活をいれたり、不作をもたらすような悪霊を追い払う。関東および中部で、特に長野から新潟県にかけて、十日を十日夜(とおかんや)と呼び、田の神の祀りを行う。子供たちが藁苞で地面を強く叩く習慣は、亥の子の行事と共通している。川越地方では十日夜の前晩と岡の亥の子と名ずけ、十日夜を田の亥の子という。土地の中にもぐる精霊に活をいれようとすることで、次ぎの年の生産力を高めようとする、亥の子も、十日夜もその考え方が共通としている。稲の刈り上げを祝う日について一定でないのは、農作業の進行には、地域差がみられ、気候や家の労働力によるからである。岩手、青森へかけては、十六日であり、団子十六個を供え、田の神が山に帰って山の神に戻る日であるとし、山に入る仕事を禁止し、田の神を送り祀る日としている。

（B）漁村

十月の漁村は、秋漁の最盛期であるが、祭りの方も年中で最も多い。台風の季節が過ぎた仲秋には、海の幸多かれと祈念し、海上安全を願い、沖止め

の日を賑やかに過ごす。例えば、兵庫県赤穂市坂越の大避神社の十二日に催される秋祭は、大阪の天神祭や厳島神社のように賑わい、播磨の舟祭といわれ、御座船は二十余隻の供奉船を従え、湾内一周の後、御旅所にわたり、夜にお宮に還幸する。岩手県釜石市高幡山の尾崎神社の祭は、二十八、九日に催行され、二十八の宵宮には、各漁船が船飾りをしてお日待ちをし、二十九日には、各人が沐浴斉戒して、百隻余りが順列を整えて、湾内を一周する。その後奥宮に行き、御召船だけが供奉して帰還するのであるが、後宴の三十日には大漁祈願が厳かに挙行され、この日は沖止めで、漁業は一切禁止であった。他、高知県安芸郡東洋町の野根八幡宮、愛媛県温泉郡北条町の鹿児神社、等の秋祭りが催される。

十一月の行事

（A）農村

二十三日から二十四日まで、全国で大師講がみられる。四国の各地では、十一月二十二、三、四日ことをお衣替えの日という。この日に遠くから大師様という異神が来訪するので、歓待するよう、家中で忌籠りする夜だったのである。また、二十五、六日ころから十二月の五日にかけて、神奈川県北部の相模大山山麓から川崎市の一部の農村では、ミカリ婆さんとかミカワリ婆さんという妖怪が訪れるという伝承行事がある。これも同様に、収穫を終え農事に一段落ついたのを機に、忌み籠りして過ごそうとする風習である。

（B）漁村

漁民の信仰対象である恵比須様を祭ってあるのは、兵庫県の西宮神社と大阪の今宮神社であり、恵比須祭は、年始か秋のいずれかに催行されるのである。正月の行事には、その年の豊漁を願い、労働契約など諸事の取り決めが行われ、秋の行事では豊漁の感謝をこめて、その永続を願うのである。例えば、石川県の能登半島の漁村では、恵比須様は十一月二日に海から陸に上がり、一月十日に海に帰ると信じられている。漁村の多くは、十一月（旧十月）十日から二十日までの間に、網元や船主の家では乗子を集めて、恵比須講の

祝宴が開かれる。

十二月の行事

（A）農村

一日は、また十五日の場合もあるが、川渡り朔日、川祭りの日で、関東では、この日に搗く餅を川ビタリ餅と呼んでいる。名称は異なるが、全国で餅が搗かれており、この餅を食べると水難に遭遇しないという。

旧暦十一月の能登半島のアエノコトでは、田の神を迎えて（12月５日）、御馳走し、丁寧にもてなし、種籾俵に宿らせ、お送りする（２月９日）という新嘗の祭りがある。

十三日あるいは八日は、新年を迎える支度の日で、仏壇神棚を含めた掃除、煤払いの行事、事始め、すなわち物忌みに入る。一般的に、農村では二十九日に餅つき、三十日松迎えとしての門松立てが習俗化している。

（B）漁村

各戸で片付けや掃除をしたりするが、共同体が協力しあい、正月の準備をする。例えば、三重県尾鷲市九鬼町では、当屋の人々が、三十日に神社や村全体および船や家を飾るものを作るため、十五日ころにはその飾り用の樹木を伐採確保しておく。二十八日ごろ、家々では煤払いや餅搗きが行われる。三十日から大晦日にかけて、墓参りと寺参りをする。大晦日から元旦にむけて火祭りが催される。

[考察]

一月の行事

（A）農村

トンド焼の小正月の神送りを、この世とあの世の象徴的な境で行ったところから、この神は祖霊とも考えられる。予祝や予見の行事が、小正月に集中

するが、それらは、祖霊に神頼みし、守護や農作物の豊饒等を頼んでいるのかもしれない。農民の場合、正月に、精進的な行事を繰り返すことで、みずからを心理的に祓い、年の神迎え送りに臨めると考えているようである。

（B）漁村

潮垢離で禊ぎ、氏神社で土地の神にお参りした後は、忌み謹む態度をとり、できるだけ身体の浄化を保つ。その態度が漁獲高を左右させると信じている。漁業者の場合、正月に神を迎えるのにあたり、徹底した身体の浄化をはかり、自分たちの行動いかんで神の処罰を受けることを前提にしており、神霊を畏怖すると同時に畏敬の念をもって迎えていることがわかる。また、正月の初乗りでは、船の守護神である船霊様を船に乗せたり、氏神や龍宮様に御神酒を供え、恵方という縁起をかつぐ。正月の労働契約では、直会前に、漁師は氏神様に参詣するが、契約日だけでなく、常に氏神や龍宮様や恵比寿様に祈りを捧げているので、漁業者の神様への信仰心が熱いことがわかる。正月の十日前後は、龍宮様を祀ると同時に恵比須様を祀ることもあるが、龍宮様は、豊漁的な恵比須様とは別の存在（超自然的な存在）なのだろう。また、網代の割り当て等を氏神の前で決めたりし、氏神様への漁民の帰依には多大なものがうかがわれる。

二月の行事

（A）農村

重ね正月を祝うといい、農事前に徐厄するために仕事を休むのであるが、二日灸も、重ね正月同様、農事前の無病息災で徐厄するためであり、それらは、田の神を迎えるための物忌みでもあろう。また、二月の契約更新の行事については、二月は農事前の田の神降臨前で、人生の衣替え、前年の穢れの徐厄の行事ともいえ、いずれにしても同様の趣旨のものである。また、コト八日までの二カ月は、四月頃（後述するように、三月十六日頃ともいわれているが、）山から迎える神霊あるいは田の神迎えをする準備の為の物忌み期間といえる。

（B）漁村

二月に漁村で行われる祭りには、鬼の祭事が多く、厄落としを海で行い、これから出没するかもしれない様々な困難や遭遇する危険及び災難を防ごうとするために、禊ぎが行われるのだろう。

三月の行事

（A）農村

三月節供には、形代に災いを託し、水に流して徐厄し、祓いを行ったのは、家内安全もあるだろうが、三月十六日頃の田の神迎えのためもあるだろう。四月の田の神降臨は一般的だが、三月十六日頃も春ゴトといい、山からの田の神迎えの行事が行われる。いずれにしても、気候は地域差が大きいので、当然田の神降臨の期日にもずれが生じる。春分は、日迎え日送りをして、太陽の恵みを拝む日であるとされているが、尊い神の来訪とも重なり、マレビト神のもたらすものの象徴を富と考えるならば、豊穣祈願と考えられる。また墓参等が盛んとなることより、太陽信仰崇拝の中で、先祖の霊鎮めを行っているのかもしれない。

（B）漁村

三月節供頃の浜降り神事は、御降臨された神霊を鎮める祈りなのだろう。また、磯開きでは、解禁日の漁獲物を氏神に供えるが、これも漁民と氏神との密着度がうかがえる。大汐時期に、大漁や海上安全を祈念する浜祭りが行われ、恵比須神の前で予祝を行い、氏神の前では漁業の決め事を行い、違反者は神罰を受けると信じているので、常に氏神様には親近感をもっていると同時に畏怖する気持ちが強い。潮祭では、氏神社に忌み籠ったり、あるいは網元と漁師は山あて対象の山に登り、氏神で御神酒飲んでから網元の家の宴に出席して、漁祈祷や潮直しが行われる。ここでも氏神への帰依の強さがうかがわれる。また、潮流の不順や不漁を契機に、神社に参籠したり、山の神に祈りを捧げる登山を行うことより、山の神も畏怖していることがわかる。

四月の行事

（A）農村

四月八日頃、田の神が降りてくるとされているが、日の神迎えの日とも重なり、春分の日の神は祖霊とも重複しているので、田の神は祖霊とも考えられる。四月十五日の種浸粥では、豊穣を祈願し、神社に予見してもらうが、その根底には祖霊とは異なる神霊のさらに客観的な判断にゆだねる気持ちがみられる。

（B）漁村

春祭でも、海中に神饌を捧げて恵比須神を慰撫し、豊漁を祈願するが、そこには常に、漁民の生活の糧を与えてくれる恵比須神に感謝している様子がうかがわれる。

五月の行事

（A）農村

農耕者は、田植えで重要な五月に、作物が干ばつや浸水に見舞われないように、水の神に祈願する。また、四日夜から五日にかけて、早乙女たちは田植え前に物忌みを行い田の神・男性を迎えるので、菖蒲湯につかり、禊ぎが厳重に行われた。この物忌み態度により、稲の豊饒さが決まると考えたのだろう。十五日も、五日と同様に物忌みで、田の神迎えのサオリを行う。サオリ終了後、サナブリで田植えじまいの直会を行い、田の神を丁重にもてなす。

（B）漁村

五月の海上渡御する荘厳な船祀りでは、海神の霊を慰めるものが多いが、漁に備えて、特に海上安全を祈願しているのであろう。

六月の行事

（A）農村

六月の一日には、再び正月の餅を食すが、無病息災的な意味合いがこめら

れているのだろう。また、十五日あたりには、水の神を祀ったり、虫送り行事が多くなるが、湿気の多い時期の対応の仕方が農作物の状態を決定つける。水害や虫害に合わないようにとの祈念は不可欠であろう。また、虫送りの行事では、虫害は悪霊しわざとみなし、形代にのせて村境で捨てるところより、常に身近にあの世を考えていたことがわかる。六月末に、茅の輪くぐりをし、半年間分の穢れを祓い（正月も祓いと考えると）と無病息災、家内安全等の意味合いをこめているのだろう。

（B）漁村

漁村では六月上旬に、魚供養が多いが、生きとし生ける物、神が賜り下さったものと魚をみなしているのだろう、魚類にも霊魂があることが前提に、霊鎮めを行う。正月よりも、六月に龍宮祭および海神を慰める祭を行うところが多いが、農業者と同様に、半年を区切るとも考えられ、海神を慰撫することで、海上安全の確保と、間接的には豊漁祈願にもつながるだろう。

七月の行事

（A）農村

お盆には、先祖の霊を迎えるために周到に準備し、迎え火を焚き盆花をそなえて供養するだけでなく、施餓鬼供養のように、無縁仏に対し、荒霊鎮めも行い、特にこの時期には入念に人の霊魂を供養する様子が伺える。

（B）漁村

祇園祭では荒霊を鎮めたり、御降臨された神霊の海上渡御も行われ、遭難しないように、海上の安全を祈願している。無縁仏の精霊流しにみられるように、漁民は特に、航海の安全の確保や不漁に見舞われないようにという心理が働くからだろう、荒霊に対して畏怖する感情が強く、漂流死体に対する取り扱いも単に穢らわしいものと片付けるのではなく、できるだけ浄仏させるべく工夫がみられる。利害が働いての心理という見方もあるだろうが、むしろそこには、魚供養にもみられるように、生きとし生ける物すべてに対する愛情のようなもの、アニミズム的な感覚での敬虔な信仰心がみられる。

八月の行事

（A）農村

八月一日、災厄を形代につけ、身体を祓う行事があるが、田実りが病虫害に合わないようにということなのだろう。二百十日には、風の神に祈願し、神社に忌み籠ったり、寄り合って会食を催したりして、自然神である風の魂を鎮める工夫がうかがわれる。

（B）漁村

八月潮の祭事では、潮の変化が漁の良し悪しを決定するので、神様に祈願し、超自然的な神頼みを行っているといえる。八月の夏越祭では、それまでの海の神の守護に感謝し、今後の航海安全と大漁を祈願し、常に海の神を慰撫している様子がうかがわれる。また、八月には海から悪霊が来訪することを前提に、火祭りで災厄を祓う、祈祷が行われたり、六月同様に鯨の供養も行われ、様々な霊を鎮め、その祟り等に合わずにすむようにとの祈願であろう。

九月の行事

（A）農村

畑作の収穫祭では、畑作の代表的な農産物である芋等を、月夜の晩に供えるが、御神体である月に祈り感謝の意を表して捧げるのだろう。

（B）漁村

九月の秋祭りには、氏神様に豊漁と海上安全の祈願を託しているが、威勢のよい神輿渡御や海への神輿を投げ入れ、男女の氏神を慰撫したりする場合もあり、特に、秋の豊漁を祈願しているのだろう。

十月の行事

（A）農村

宮本常一（1985）によると、亥の子や十日夜の刈り上げ祭りがあるとす

ると、田の神を迎えての祭りがあり、その忌籠りがなされなければならないとの指摘があるが、土地の精霊に活を入れようと、藁苞でたたき、生産力を高めようとするのがその忌み籠もりにあたるという。刈り上げ祭が神への感謝祭であり、一年の締めくくりであることがわかる。

（B）漁村

十月の漁村は、秋漁の最盛期なので多忙ではあるが、祭りも年中で最も多く賑々しい、それだけ、海上安全を願いながら、豊漁の祈願が強いことが伺われる。

十一月の行事

（A）農村

農村では、十一月の二十三日ころから二十四、五日あたりまで、異神の来訪がみられる。収穫感謝祭後の忌み籠りとされているが、常日頃の、親しんでいる田の神や祖霊とは異なる神的存在なのであろう、その神威にすがろうとする反面、異邦的な神なので畏怖する気持ちも強いと思われる。訪れる神により、農民の定着した生活の中で、日常的に蓄積した穢れを祓う機会でもあり、また、衣替えの日といわれるように、新規一転させる日とも考えられる。

（B）漁村

恵比須様は年始と秋のいずれかに催されるが、秋の方の行事では、豊漁の感謝をこめて、その永続を願い、年始や日ごろの参拝では豊漁祈願を託しており、幸をもたらす恵比須神に、漁師は心理的に強く依存している。

十二月の行事

（A）農村

六月と十二月は類似した行事がみられ、両月ともに、もとは水の神を祀る月といい（宮本常一、1985）、川祭りの日に餅を食べると水難に遭遇しないという。餅は祭りの中で常に神饌として扱われているが、その餅を食すこと

で、水難等の水の災害から神の守護をもらえると考えたのだろう。煤払いの行事は十二月上旬か半端から始め、年の神を迎えるために、物忌みに入る。

アエノコトは、田の神が各家の種籾俵に宿り、稲霊の再生・（苗の成長）の象徴の儀式（野本寛一、1993）と考えられ、新しい年の収穫に向けて、一層の豊穣を祈念することがうかがわれる。

媒払い後の物忌、アエノコトの忌襲り、コト八日の物忌み期間等、いずれにしても、新年の神迎先（送り）の為の霊魂の再生期間といえると思う。

（B）漁村

正月準備の為に、共同体が一体になって、十二月半端から山に入りお飾り用の樹木を伐採しておく。山に入る、山の神と出あう、つまり、里では物忌み期間で、収穫祭後は、田の神を山に送っており、また、その山の神から、漁民の方は、樹木を戴くと考えると、神霊の宿った木を漁村に持ち帰り、村や家々に飾ることになる。また、三十日から大晦日にかけても、墓参りをしておくのは、筆者の調査結果（1994）と一致し、漁民の方は、命日や盆だけでなく、常日ごろ家の近くにある墓に参り、暮れに参ったり、暮れから元旦にかけて火祭りを行ったりするのは、新しい年を迎えるにあたっての締めくくりのようなもので、死霊という穢れをもちこさないという心理が働くのだろう。潮垢龍の行事他、漁民の儀式では船を海にうかべ、常に海潮の水で浄化させて、禊を行なうのと同様に、ここにも、漁民の累積せずに常に一掃する浄化思考のようなものがみえるように思う。

［さいごに］

以上、神迎え神送りの祭りをするために、忌み籠りをし、祓禊の行事を行うという、自然のリズムにあわせた人々の生きざまが如実にうかびあがる年中行事を柱に、農業者と漁業者との心理の差異を考察してきた。現在のように人々が都市化の人工的な単一のサイクルで生きているのではなく、この世とあの世、つまり、現世的な世界を陽とすると、祖霊や神霊の世界は陰となり、

両界をもちあわせながら、自然の感動の中で他者と共存し、予見や予祝をし困難なことにも立ち向かい、人間らしく生きてきた人々を、さらに心理学的な立場から比較検討していきたい。今後は、今回の考察とつきあわせ、後続の論文（実態調査を含め）で展開していきたい。

参考文献：

折口信夫、1930－1932、年中行事、「折口信夫全集、第十五巻、中央公庫、1976」
田中宣一、1972、年中行事の研究、桜風社
田村勇、1996、海の文化誌、雄三閣
野本寛一、1993、稲作民俗文化論、雄山閣
萩原秀三郎、1988、豊饒の神と家の神、東京美術
服部純子、1994、南紀における伝統的職業と住民の社会意識、南カリフォルニア大学院
宮城雄太郎、1976、漁村歳時記、北斗書房
宮田登・萩原秀三郎、1980、催事百話－ムラとイエの年中行事、ぎょうせい
宮本常一、1975、民間暦、講談社
柳田国男、1937、年中行事覚書、「柳田国男全集、第十六巻、筑摩書房、1990」
和歌森太郎、1970、民俗歳時記、岩崎美術社

A Study of Consciousness in Farming and Fishing Villagers: Religious Faith through Regular Annual Events (English Résumé)

Sumiko Hattori

The purpose of this study is to investigate the difference of religious faith between the farming villagers and fishing villagers by adopting an example method which regards regular annual events from the viewpoint of interaction between the people and their traditional occupations. Regular annual events were chosen because they seem to be the reflection of each original way of living and thinking.

Farmers' desire for fertility is dependent upon pre-celebration ceremony for Productivity and its fortunetelling in New Year, and especially upon April's stately ceremonious prayer for fertility.

The god of rice fields is thought to be the most important compared with other nature spirits. After sending it in winter until spring, there seems to be a long period of abstention. There are also many kinds of exorcism ceremonies as sending-away insects in June, making undesirable spirits be attached to some substitute images in August's and March's ceremonies. At yielding rituals as well, knocking down the land with a straw stick gives exorcises unfavourable spirits, which seems an abominable behaviour for welcoming the God of rice. The ways of the ritual of deceased or of the feast of Tondo fire suggest that farmers tend to believe the existence of the world after death near to them. As for villagers of fishing, they respect the god of Sea/Ryujin-god most deeply, and pray to Ebisu-god for productivity. They conduct ritualsof reverently receiving them

as follows: after purifying themselves by sea-water and exorcising in shrine in order to be a god-person, they worship them, offering sacred food and rice-wine. The spring ritual of a god reveals how decently people believe in god.

At a poor catch, they hold a sacred ceremony by themselves, believing that unfavourable spirits have caused it. Even at an event of an employment contract between fishermen and their owner, they show it in front of the god in shrine with absolute obedience. They regard this life unconsciously perpetual youth and long life. They cherish their life in this world, not life after this, since they seem to think that their life in this world is always protected by the absolute god accordingly to their standard, lest they should not forget to hold the sacred ritual ceremonies to it.